

イメージ表現脳を獲得するための実践

愛知学泉大学 家政学部 こどもの生活学科
教授 加藤 万也



1. イメージ表現を苦手とする学生たち

私が勤める愛知学泉大学家政学部こどもの生活学科は、保育士資格とともに小学校教諭免許、幼稚園教諭免許も取得できるカリキュラムを組んでいます。簡素に言えば、幼児期や児童期の教育能力修得を基幹としている学科です。そうした低年齢の教育という点において、情操教育という観点から図画工作関連の能力修得の比重は一般教育学部のそれと比して大きいと考えます。しかしながら、本学科に入学してくる学生の半数ほどは、絵が苦手だと言います。その原因を聞き取りによってリサーチしたところ「上手く描けない」という理由が多く、それは「そっくりに描けない」ということでもあるわけです。日本の図画工作教育で重要なのは、絵画や彫刻の技能技術習得ではなく、「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う」¹⁾ということであり、保育なり教育者なりを目指すにあたっては、子どもが表現の喜びを感じ取ることができるような教育を実践することにあると考えます。

表現を素直に楽しめない学生に対し、新しい感覚を持たせるための授業実践が、イメージ表現へのチャレンジです。絵が苦手という学生の多くは、既成概念に囚われ与えられたイメージの呪縛にさえ気付いていないというのが実態でしょう。イメージする習慣のない学生に対し、いかにしてイメージの楽しさを味わわせるかが重要なキーになるわけです。例えば、レモンは黄色、空は青、チューリップは赤、木は緑……といったような固定概念がはびこっていて、心で対象を捉えようとしていません。そうであるなら、無理やりでも心で捉えるしかない表現を実践することで、自己表現に対する自信を持ち、表現の喜びや楽しさへとつなげたいという思いから実践してきたのが、シュタイナー教育²⁾で有名な「にじみ絵」を参考にした授業です。今回はその授業を紹介させていただきます。

2. にじみ絵の着想

先に述べたように、物事を抽象的にイメージするということが、学生たちは苦手です。その状況を打破するため、物事を捉える時に横入りしてくる固定化された概念に束縛される構造を取り払うことを実践してみることにしたわけです。具体的には、輪郭線が描きにくい手法を用いることと、それによって固着したイメージから離脱してしまう形状を承認することで、再度自身の頭で捉え直さないといけなくなり、否が応にもイメージの構築をせざるを得ない環境を生み出してしまおう設定を構築しました。それに合致する手法が、まさに「にじみ絵」だったのです。「絵が下手」という学生の多くは、固定化されたイメージから自身の描画がずれていく恐怖を抱いています。しかし「にじみ絵」の場合、ずれるどころの話ではなくなるので、あきらめと開き直りという逆視点から、かえって楽しんでしまっているのかもしれない。

このプログラムではウォーミング・アップとして、1950年代の抽象表現主義の画家「ヘレン・フランケンサラー」の作品鑑賞を行います。彼女のステイニングという手法は、輪郭線を持たないだけでなく、色面の広がりによって茫洋としたイメージを抱くことが比較的容易です。作品スライドを見ながら、学生たちに好き勝手に「タイトル」を付けさせます。そしてそれを発表し合うことで、固定化されたイメージに囚われなくても良いのだという自覚を持たせます。



ヘレン・フランケンサラーの作品
出典) <https://art-discussion.com> ~これまで誰も教えてくれなかった~『絵画鑑賞講座』

次に、シュタイナー教育で用いられる「にじみ絵」のコンセプトと方法を示します。紙を水でたっぷり湿らせ、そこに薄く溶いた絵具で描くというものです。この点については読者のみなさんはよくご存知だと思いますので詳細説明は割愛しますが、いわゆる棒人間や輪郭で描くという象徴的な方法を剥奪することで、アンコントロールな図像表出によって「そっくりに描く」という常識の枠を外していきます。

3. にじみ絵の実践

<準備>

- ・水を入れるバット・水彩絵具（3色ほど）と筆・新聞紙・ハガキ大ほどの画用紙

<手順>

- ① 小皿に絵具を薄く解いた3色を用意（学生の任意選択による3色）
- ② 画用紙をバットに沈め20秒ほどして取り出し、したたりがなくなったら自席へ



- ③ 教員がテーマを出し、それに合わせて30秒ほどで描く「耳の奥がかゆい感じを描け」「背中をボールペンで突かれた感触を描け」「虹の中に入った時に見える風景を描け」「目を閉じて目蓋の裏に見える模様を描け」など、象徴的な形を持たないものを指示
- ④ 描き終わったら、ドライラックに置いて、次の紙の準備



この手順で、おおよそ8枚ほどの絵を次々に描いていきます。学生の感想では「開放感を感じた」とか「何だかわからないけど、ウキウキした」というものがありました。それは、規定に沿わせなければならないという呪縛から解き放たれたことによって生じた心情的快感なのだと分析しています。

どの絵も茫洋としたイメージ画であり、どれも同じように見えなくもない作品たちですが、当の学生にとっては「これは背中への絵」、「これは目蓋の絵」など、しっかり認識分類できていると

いうのも少々驚いた点でした。

これらの作品をドライラックで翌週まで乾燥させ、次時において第2工程に入ります。



4. イメージ紙芝居

前週に作成した「にじみ絵手法を用いたイメージ画」を学生に返却します。それを各自机の上に配列させた状態で、教員側であらかじめ用意した物語を朗読します。これは私が作ったオリジナルのストーリーで、概要は「ある難病を抱える少女が、優しい両親に見守られながら、天国に昇っていくというものですが、実はすでに両親も他界しており、少女の独り言に医師が受け応えする」という、60秒ほどで読み終わられる極めて短い物語です。物語の設定によって、授業の雰囲気は大きく変わると思うのですが、私の受け持つ学生たちは常日頃からとても活発なので、心と向き合うという環境づくりのためにあえて少々重いテーマを設定しました。



学生はその物語を聞きながら自作を眺め、「どのシーンにどの絵がマッチするか」を検討していきます。物語を印刷した資料を配布し、シーンを確認しながらイメージ画を選定していきます。その時に学生に意識させるのが、「どうしてこの絵なのか」という質問に答えられるようにすることでした。「どうせどれもパワーっとした絵だから、なんでもいいや」という投げやりな気持ちを持たせないようにするためです。

イメージ画の選択が完了したら、発表会に移ります。あらかじめ録音しておいた物語朗読の音声を流しながら、シーンごとに切り替えられるイメージ画をプロジェクターで投影します。他学

生は、それをじっくり鑑賞します。



ここで第2の驚きがありました。それは、ほぼ全員の学生がものすごく集中して画面を見つめ、頭の中でイメージを拡大させているのです。特に普段ものごとに集中できない、持続力・継続力に欠ける学生こそが喰い入るように見つめ続けている姿には、驚きを隠せませんでした。



5. まとめ

学生たちの感想や振り返りには、「周囲のことを忘れて集中できた」や「描かれている世界に没入できた」という言葉が多く出されたことから推測できるのは、いわゆる右脳が活発に働いたことでもあり、「イメージ表現脳を獲得する」ことに少なからずつながったのではないかと考えています。自分軸を起点とし、自己のイメージに包まれる快感体験を通して、幼児や児童教育の根幹に触れ、子どもの感性に共感したり揺さぶったりできる能動的な学生の育成に寄与できればと、改めて強く思うとともに、多様な工夫を織り交ぜた授業展開を今後も継続していきたいと考えているところです。

- 1) 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）図画工作編 第 2 章第 1 節図画工作科の目標
- 2) ルドルフ・シュタイナー（1861～1925）が考案した、「人間形成」を主軸とした教育実践